

新たな不登校が生じない取組 「未然防止」の取組

不登校が生じない魅力ある学校・学年・学級づくりの推進

【取組1】(A中学校)

生徒の委員会への所属意識を高めるために、SDGs17項目全てを各委員会に当てはめ、その項目について各委員会が思いを込めて取り組んだ。例えば、「飢餓をなくそう」という項目については、給食委員会が取り組み、「食べ残しをゼロにしよう」というメッセージなどを込めて取組を推進した。

学校生活の中で、全員が共通して取り組んでいく事柄があることで所属感の高まりにつながった。



【取組2】(B中学校)

生徒がきずなを紡ぐために、「思いやりのある挨拶を主体的にできるように」という目標を立てた。

そこで、生徒会が「挨拶ムカデ」を企画した。

写真のように、学級委員や生活委員が率先して、昼休みに列を作って挨拶しながら校内を巡った。

活動中に生徒が列に加わっていき、挨拶を通して学校全体のきずなが深められた。



【取組3】(B中学校)

地区の「特別活動の日」に、学級目標の振り返りを実施した。事前にとった学校生活及び学級目標の振り返りアンケートの結果を共有し、生徒が発言しやすい環境を作った。

また、話し合う前に、人権上問題のある発言や聞き手を意識できていない発言、最後まで話が聞けない態度などに注意することを確認したことで、共感的な人間関係の構築に効果が見られた。

【取組4】(B中学校)

特別支援教室の担当教員を講師に、特別支援教室の取組等を例にして、多様な生徒の個に応じた支援について研修した。

また、「B中特別支援ハンドブック」を作成し、校内委員会の目的、当該校で合理的配慮ができる内容や決まりの確認、関係機関の情報、進路先などをまとめた。

本ハンドブックを見ることで、教職員の誰もが、支援が必要な生徒に早期に対応できるようになった。

多様な学びの場を確保する取組

（「早期支援」及び「長期化への対応」の取組）の推進

支援会議（C中学校）

支援会議で使用する資料を工夫した。
第1に、特別な支援を必要とする生徒と不登校の生徒を区別して検討する工夫を行った。

第2に、関係機関と連携したアセスメントの結果を支援に生かしやすいように情報共有した。

アウトリーチによる支援（B中学校）

保護者との連絡が難しい家庭について、アウトリーチ支援を強化した。

当該生徒や保護者と会うことができない場合も、配布物に担任等からの手紙を同封することで、当該生徒の気持ちが学校とつながるように意識した。

校内別室における支援（D中学校）

校内別室において、個別学習や全員で行う学習ゲームなどを行う時間を設定した。規律を守ることや相手の話を聞くことにつながり、お互いに考えを出し合う様子が見られるようになるなど効果的な活動になった。

また、校内別室の開室時間以外にも運動したい生徒だけが集まって運動を行った。時間を指定し、校庭の空きスペースや武道場などで、みんなが楽しめ、気持ちがリフレッシュされる軽い運動を生徒が決めて行った。参加人数も少しずつ増えており、体を動かすことで交流が生まれコミュニケーションの場となっている。

デジタル機器を活用した支援（B中学校）

教室の授業をリアルタイムで配信し、校内別室及び自宅で学習する不登校生徒がオンライン授業に参加できるようにしている。

また、特別支援教室においてもオンライン授業に参加している生徒がいる。

関係機関との連携（D中学校）

校内別室を利用している生徒が校内別室登校前の時間にS Cとの定期面談を行っている。

また、S S Wが校内別室での指導に協力することなどもある。

このことから、関係機関との情報共有及び連携が効果的にできている。

成 果

「自己存在感の感受」を意識した学校の取組を多くすることで、生徒の登校意欲の高まりが見られた。また、不登校の生徒への早期支援に努めた結果、学校復帰する生徒が増えた。

課 題

支援を要する生徒が多くいる中で、個々の生徒について効果的にアセスメントし、その結果に基づいて支援する必要がある。